

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2470800281		
法人名	医療法人社団愛敬会		
事業所名	認知症対応型共同生活介護事業所 グループホーム 若の山荘		
所在地	三重県伊勢市楠部町若の山2605-13		
自己評価作成日	平成25年11月29日	評価結果市町提出日	平成26年11月17日

※事業所の基本情報は、介護サービス情報公表システムページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaisokensaku.jp/24/index.php?action_kouhyou_detail_2013_022_kihon=true&JigvosvoCd=2470800281-00&PrefCd=24&VersionCd=022
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	社会福祉法人 三重県社会福祉協議会
所在地	津市桜橋2丁目131
訪問調査日	平成25年12月13日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

当ホームは手作りのケアをモットーとしています。相田みつるさんの「人間だもの、そのままがいいがな、今が大事」をいきいき人生のびのび人生を目指し日々生活支援の実践をしています。食べる楽しさを春と秋のお彼岸にはおはぎを作ったりして四季折々の行事食を利用者様と共に食べています。その他七夕の飾りつけやしょうぶ湯等で季節を感じてもらい、湯たんぽ、生姜湿布の安眠への配慮もしています。年末の門松・おせちも手作りです。防災の取り組みとして全居室に飛散防止フィルムを張り終え、現在避難マニュアルの見直しを実施しています。竜巻や暴風雨等も想定が必要と考えて適時避難方法の見直しの実施をしていく方針です。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

長年において地域医療に携わっている病院が母体であり、隣接には老人保健施設がある。見晴らしの良い高台に立っており、設立して14年が経過し、当時から勤務している職員も多く、利用者とはある意味では馴染みの関係となって安定した毎日を送っている。理念やスローガンは職員の意識に根付き、ケアに反映されている場面が多く見られる。利用者に寄り添う姿は長年培われた信頼関係と、反省を繰り返しながらの生活支援の実践の積み重ねである。そんな人のぬくもりを感じる事業所である。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	<input type="radio"/> 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	<input type="radio"/> 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	<input type="radio"/> 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	開設当初からいきいきのびのび人生をモットーにしている。生活を支援すると共に本人の意志と生活リズムや生活習慣を尊重して支援している。地域との交流も外出行事を通じて実践に繋げている。職員の専門性得意分野も活用している。	事業所独自の理念を玄関に提示し、事務所内には管理者・職員と一緒に考えた今年の年度目標も掲示してある。職員らは日頃から、月2回行われる会議で理念や目標の振り返りを行っている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	隣接する老健の行事や月一回の外出行事を通じて地域との交流を図っている。家族様や知人も重要な地域であると考え、毎月家族様への手紙を出している。又、面会機会を多く持つ様に促している。	地域主催の行事である神社の餅まきや萬歳楽に参加したり、地域のボランティアの訪問等で地域住民と交流を行っている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域の方に集まってもらい、二ヶ月に一回運営推進会議を持っている。荘の生活や活動内容を知ってもらおうと共に理解してもらえる様に努めている。認知症や国の施策についても知ってもらえる重要な機会と考えている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	事業所活動状況や外部評価結果の報告やそれに対する改善の取り組みの報告をしている。年計六回の開催を基本としている。家族様・地域・行政の参加も協力的で若の山荘だよりの報告をもとに現状報告と意見交換を実施している。	運営推進会議は隔月に開催している。参加者は家族・区長・老人クラブ・民生委員・介護相談員・市役所・理事長であり、積極的な意見交換がされている。会議では介護食を試食してもらうなど、今後も有意義な会議になるようテーマを検討している。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	伊勢市役所との連携も取る様に努め行政からの協力要請にも可能な限り前向きに対応している。運営推進会議にも市は協力してくれている。管理者が中心にはなってしまうが、市役所と連携して浴室の改装等相談にのってもらっている。	市役所に出向き相談に乗ってもらったり、市の依頼も受けお互いが協力関係となっている。運営推進会議の場では市担当者と活発な意見交換を行っている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束については社内研修を持ち、しんしんのびのび宣言を掲示して全職員で生活支援に日々取り組んでいる。玄関の施錠は基本的にはしておらず自由に日向ぼっこしてもらっている。	徘徊や点滴を抜去する利用者には、拘束をしない方法を管理者と職員が話し合いをし、また「不適切なケア防止トレーニングシート」で各職員が自己点検をする機会があり、拘束をしないケアに取り組んでいる。研修もされており、参加できなかった職員に伝達講習を行っている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	毎月の会議の時に高齢者の虐待が行われていないかを生活支援の方法検討の際に検討している。また、無意識に不適切なケアを含めて虐待が無いかも検討している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	認知症を抱えた入居者の生活を守る為に、成年後見制度を一名利用している。又社内研修において成年後見制度等の制度を学ぶ機会も設けている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時には、基本的に時間をかけて説明して家族様に納得してもらった上で契約いただいている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	会議や普段の生活支援業務の中で家族様の声を各々の職員から持ち寄り、意見箱や毎月のアンケート送付で日常業務に反映する様努めている。今年度も相談員派遣を受け外部の目も活用出来る体制をとっている。	面会や毎月発送している家族宛の手紙、意見箱、運営推進会議等で意見を表せる機会がある。出された意見は「相談・苦情内容記録簿」に集約している。最近出された意見は、災害時、隣接している施設の協力要望であり、現在検討している。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月の会議や日々の日常生活支援の中で意見は集められ可能な限り話し合いを行っている。また、日々の生活支援業務の中でも各自の判断で生活改善に取り組み適時話し合いをしている。ケアプランにも反映してケアの方針を共有してる。	理事長は往診以外にも何度か事業所に立ち寄り、職員とコミュニケーションをとっている。月2回の会議では職員との意見交換が活発であり、最近では避難訓練も含めた夜間出勤の負担について職員から要望が出たため改善された。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	代表者は各々の職員の得意分野と協力のもと入居者の生活支援に必要な業務を役割分担している。勤務状態や業務内容についてはタイムカードや毎月の会議で勤務体制に改善点が無いかについても検討する機会を持つよう努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	パート職員も含めて社外研修にも積極的に取り組み。会議にて報告し、各自学習出来る様にCDにて学習できる体制もとっている。得意分野を各々の職員は活用して業務に反映する様努めている		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	地域密着型サービス協議会定例会や同業者や社外の研修に可能な限り希望をきき参加する様努めている。又、サービスの向上に努めている。伊勢度会地区防災検討会の活用も重要と考える		

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援						
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	初期面談で生活状況を把握する様に努めている。又、管理者・担当者で面会時に家族様から本人の声や家族様の声を把握する様に努めている。センター方式の活用も重要を考えている。			
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	これまでの家族や当事業所に入所までの経過を適時全職員で聞き取り把握する様に努めている。面談時丁寧な対応やセンター方式も重要と考えている。			
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	相談時に本人様・家族様の思いや現在置かれている状況を傾聴して今後どのような生活形態が良いのか当事業所の利用のみに限らず話し合い、適時ケアサービス計画の提案及び経過検証を繰り返して行く様に努めている。			
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	支援する側・支援される側という意識は可能な限り持たず利用者・職員が共同生活者として、各々得意分野や好きな事を生活の中で持てる様に支援している。また、生活そのものが認知症の一番のリハビリになると考えて生活リハビリを実施する			
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	入居者の生活状況を毎月一回手紙で知らせたり連絡が必要な状況有れば適時連絡をしている。秋祭りでは家族様にも参加してもらい、楽しい時間を過ごす事が出来た。			
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	利用者や御家族様の面会・外出・外泊やこれまでの生活習慣の継続(神父さんの訪問等)も実現している。また、秋祭りの家族様の参加等の機会も持っている。	センター方式を活用して馴染みの関係を把握した情報を、日常生活支援に生かすために介護計画に入れ職員の共有方法となっている。また馴染みの場へ外出できなくても、ふるさとの本や昔の写真を見ながら思い出話をして支援している。		
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	朝・昼・夕の食事やおやつの際に職員も一緒に会話をしながら楽しい時間を持つ様に支援している。席についても相性も考慮した席を適時考えている。			

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	体調を崩した入居者は家族様と協力して体調管理に努めて、退荘にならない様食事摂取の方法を検討して生活支援の方法を検討している。既に亡くなられた家族様ともグリーングケアも実施している		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日常生活の中で入居者と会話する機会を持つ様に努め、その言葉や表情から思いの把握に努めている。もちろん初期面談や適時面会時の家族様との話の中でも入居者の生活について話し合う機会も持っている。	初期面談やセンター方式を活用して、思いや意向を把握している。困難な場合は日頃の関わりの中でさり気ない会話や表情からも思いをくみ取り、「本人はどう思っているか」の視点にたって支援している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	センター方式活用はもちろん面会時の情報収集と一緒に生活空間を共にする事でどのような生活が良いのかを模索するように努める事で生活の中に笑顔づくりができています。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	生活全体・心理状態を常に意識して日常生活支援につとめている。したいこと・したくない事・するべき事・出来る事・出来ない事・出来る様にしたい事を把握して生活支援内容を検討している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ご本人や家族様には常日頃の関わりの中で課題として取り組むべき事柄と今取り組んでいる事で更に取り組むべき事柄を話し合いケアプランの毎月の話し合いで検討している。	本人や家族の要望を聞きとり、介護計画者が計画原案を作成し、会議で話し合った後家族等に計画書を説明し同意をもらっている。担当者は毎月モニタリングを行い、それを基に課題の経過・評価をし三か月毎に更新している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	毎月の会議で話し合いをして、日常生活支援に必要な事柄を話し合い経過を記録して共有している。各自支援方法に日々工夫していて、報告しあう事で実践への反映はできている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	ご本人・御家族様の状況に応じて必要な支援は柔軟に対応出来るように努めている。その内容が一人一人の生活の満足に繋がる様に日々実践している(個別リハビリ・足欲・金魚運動・将棋・紙芝居等)。口腔ケアは現在検討中である。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	入居者が安心して地域の中で暮らし生活に楽しみが持てる様に努めている。毎月2回の往診や家族様の面会や秋祭り等で一緒に過ごす時間を設けている。また、民生委員の協力のもとで菊を玄関に飾ったり、伊勢警察署との連携も図っている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	ご本人や御家族様の納得の上でかかりつけ医を決めて、毎月2回の往診と適時診察をする事で健康に過ごす為の体制をとっている。又、隣の老健山咲苑との連携で医療の需要が大きい入居者の対応も今後検討課題としている。	入居時にかかりつけ医の説明をし、家族等の希望で事業所の協力医をかかりつけ医とし、月2回の往診を受けている。皮膚科や眼科等の専門医については職員や家族が付き添って受診している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護職員を配置しており常に山崎病院とも連携を取りながら健康管理が可能な体制をとっている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時には、本人への支援方法に関する情報を家族様の了承のもと医療機関へ提供し適時職員が見舞う等支援をしていく方針である。又、家族様と回復状態を踏まえて、今後の生活の場をどうするのかを愛敬会全体で支援していく方針である。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化指針にて本人様及び御家族様の意向を確認して、可能な限り、山崎病院とも連携しつつ重度化にも対応出来る様に努めている。今後は、医療の必要性が大きくなったときは、隣の老健山咲苑とも連携して終末期ケアにも対応出来る様に体制を整えていく。来年度の課題と考える。	利用者の状態に応じて、かかりつけ医と家族・管理者等を交えて話し合いを行っている。事業所として全介助になった場合でも、食事が摂れる状態であればケアしていく方針である。その都度利用者や家族の気持ちに寄り添って話し合いをしている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	消防署の救急手当での学習をすると共に山崎病院との連携で健康面での配慮はできる様に取り組んでいる。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	災害時の避難方法については、竜巻時どうするかや避難方法が適切かを検討している。課題であった隣の老健山咲苑との合同訓練は来年度の課題と考えている。	事業所独自の訓練を9月に行い、反省会でいくつかの課題が出た。地震体験車での訓練は地域の方達の参加があった。家具の固定や各居室の窓の飛散防止フィルムを張ったり、備蓄の用意といつ起こるか分からない災害に対して、着実に準備をしている。	災害は実践的な訓練が必要なため、備品の点検、役割り分担、避難手順及び隣接老健との協調等のマニュアルの見直しを含め、継続した検討を期待する。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	本人様の好きなお酒や食べ物を時間を決め付けず入所者様の生活リズムと要望に合わせて提供している。トイレのさりげない声かけやプライバシーカーテンの使用や訪室時のノック等の配慮もしている。	職員は(自分がされて嫌がることは絶対にしない)、その感性を大事にしながらケアをしている。ケア中のプライバシーカーテンの使用や呼び方等、利用者の誇りを傷つけないよう、管理者は職員のケアに対して日常的な確認をしている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	服を選ぶ際に入居者に声をかけ一緒に服を選び着てもらっている入居者もいる。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	寝たい時に寝て好きな時間に出てきて会話をされ又、飽きれば部屋に戻ったり猫との楽しい時間を過ごしたりして本人様の生活を支援している。又、自分の子供の様に猫を可愛がっている入居者もいる。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	好きな服を選び着てもらっている入居者がいる。また、馴染みの美容院に行く支援も実施している。このような事で生活の中に身だしなみやおしゃれが出来るきっかけ作りに繋がっている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食べたい物が有れば外食に出かけたり、お誕生日には誕生日に誕生者の好きな献立を用意して食事提供している。	献立や調理は職員がしているが、後片付けは利用者が手慣れた手つきで行っている。栄養士の検査やかかりつけ医の助言で利用者の好みにあった味付けとなっており、時々郷土食もテーブルに並んでいる。湯呑・箸・茶碗等は家族が用意している。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	隣の老健山咲苑の管理栄養士に毎月検食をお願いし評価もらっている。夜間の適度な水分補給も日常業務の中に組み入れ実施している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	食後適時声かけし歯磨きやうがいをしてもらう様に促している。今までしてきた生活習慣も考慮していく。数名づつ集中して口腔ケアに取り組みはじめていく。義歯は毎晩ポリドントに漬けて殺菌をしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄表に基づきトイレ誘導して夜間のみリハビリパンツやパットを使用している。夜間リハビリパンツを使用している入居者には必ず朝にはパットを外したり布パンツに替えてもらっている。	排泄チェック表や利用者のしぐさ、表情をみながら、各居室にあるトイレまでスムーズに誘導している。他の利用者がある時の排泄の誘導の声かけはしないよう徹底している。半数以上の利用者は自立であり維持している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	一人一人に応じた対応を実施している。アローゼンであったりシンラックであったりバナナや牛乳等で対応している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	一人一人に声かけして入りたくない時には改めて声かけしている。どうしても入浴を嫌がる入居者には無理強いをせずに清拭や着衣交換を実施している。	週3回入浴ができ、午前・午後希望があればどちらにも入れるようになっており、ゆっくりと入浴できるように時間帯も長く設定してある。入浴の楽しみとして季節にあった柚子湯やミカン湯を用意している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	希望する人には、昼食後におやつ前の全体レクリエーションの前までベッドで休んでもらっている。猫の好きな人には添い寝をもらっている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬が処方された時には説明書を確認して、服薬後の状態観察を全職員で協力しながら実施している。又、必要に応じてかかりつけ医に報告して対応している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	馴染みの美容院に担当の職員と行ったり、月に一回は外食をしている入居者がいる。ある入居者にはお抹茶の作法を指導していただいたり、生花を楽しんでもらったりしている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	床屋や外食や買出しに、職員と一緒に出かけられている入居者もいる。又、月一回の外出行事ではドライブを兼ねて食事や花見や地域の祭り等に参加している。	職員二人が行事委員となって利用者の行きたい所を聞き、家族にも協力を得ている。外出を嫌う利用者には、見晴らしの良い駐車場のベンチでのんびりと日向ぼっこをしてもらって気分転換の支援をしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	自分で支払い出来る人には、外食や買い物の時に、本人に財布を手渡し、支払いをしてもらう機会を設けている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人の訴えが有れば、電話をかけてもらったり、絵手紙や年賀状のやり取りをもらっている。又、携帯電話を使用出来る入居者には自由にかけられる様に支援している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	玄関には、季節ごとに花を植えたり、屋内に皆で作った貼り絵を飾ったり、廊下に行事の写真を貼っていつでも見れるようにする等の配慮を実施している。	玄関はペットの猫用のベビーカーが置いてあり、各掲示物の額は手作りである。居間兼食堂は家具や古いオルガン等が所狭しと置いてあるが圧迫感はなく、普通の家を思わせるような雰囲気である。廊下には伊勢の今昔の写真が貼ってあり、利用者はよく立ち止まって見ている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	テレビの前は畳スペースになっておりソファーに座ってテレビを見れる様にしている。玄関前のベンチでは利用者が日向ぼっこをして楽しんでいる。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	家族の写真やお花や家具等使い慣れたものを使って頂ける様声かけし居室に置いてもらっている。家族様が生花を居室内にして頂く等入居者様が居心地良く過ごせる様に協力頂いている。	各居室には事業所の備付のベット・押入れ・トイレ・洗面所が設置され、自宅にいた時の椅子やテーブル・家族の遺品・寄せ植え鉢・家族写真等が家族の協力のもとで置かれ、居心地のよい居室となっている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	今年新たにトイレや洗面所に手すりを付けたり居室の窓ガラスに飛散防止フィルムを貼った。一人一人安全かつ自立した生活出来る様支援している。居室の入り口は名前の書いたプレートを付けて居室の区別がつくように目印も付けている。		